



Ignis

イグニス = 炎

2024年度 夏号

発行者 六甲学院宗教部

発行日 2024年8月28日

今回は、5月と6月に行われた Magis の日の朝礼でのお話から青木光博先生と佐藤雅孝先生のお話を、また、3月の春休みに行った、カトリックの巡礼・黙想会に参加した生徒及び教員の感想文・振り返りを掲載します。

愛¹に生きること

Magis の日

2024年5月16日 木曜日

担当教員: 青木光博

おはようございます。本日の Magis の日の講話を担当する数学の青木光博です。

今日は「愛に生きること」というテーマでお話したいと思います。のっけから私事になりますが、最近私自身は体の変化と衰えを感じてきており、同時に環境の変化も体験しています。ここで具体的に述べることは避けませんが、どれもそんなに良いものではありません。

このような状況にある私は、自分が高校生のとき以来、あらためて生きることについて考えるようになりました。最も大事なものは何か、ということです。私に限らず、生きること、死について考えること、最も大事なものは何か、と問うことは、これはすなわち「よく生きるためにはどうすればよいか」という問いであり、同時に「よく生きたい」という叫びであると思います。私が高校生の頃通っていた生徒は時々「なぜ数学を学ぶのですか」という問いを発しましたが、高校生であった私にも、この問いは純粋に数学の在り方を問うているのではなく「めんどくさい」とか「こんなに宿題があるのはなぜだ」という不満を疑問の形で述べているのだということが分かっていました。同じように「生きるとは何か」「死とは何か」「最も大切なものは何か」と問うとき、それは、「私はもっとよく生きたい」と問うことにほかなりません。

さて、世の中にはいわゆる成功というものがあります。少し前は「勝ち組」という言葉もありました。例えば「成功」とは会社の社長になることのように描写されます。出世して偉くなること、人に指図できるようになること、お金をたくさん稼ぎ、所有すること。しかし、このようなことが幸せにつながると考えることはすべて幻想です。資本主義社会というのは、より多くのお金が流通することで成立する自転車操業のような仕組みですから、社会が皆さんにそのような幻想を抱き、皆さんがもっと多くと急ぎ立てられれば急ぎ立てられるほど、資本主義社会はその枠組みの中で発展するのです。しかし、資本主義社会の発展とあなたの幸福の間には何も関係がありません。

なぜ幻想と断言できるか。私はよく次のように考えます。私がただ死んだらどうなるか。おそらくほとんど大多数は無関心でしょう。周りの人は最初の頃は悲しんでくれるかもしれない。しかし例えば職場では早々に代替教員が来て、新しい専任の先生が来て、新しい先生には新しい先生の魅力もあり、また皆さんはその先生のもとで学んでいくでしょう。そしてこれはどんな職でも、どんな人でも同じです。社長になっても、死んだらどうなるか。新しい社長が来るか、会社がなくなり、ほとんどの人は次の会社で働くようになるかです。「代わりがない」ということは全く稀で、「代わりがない」という誉め言葉は「今のあなたは私にとって便利だからそのままいてくれ」という願いの言い換えに過ぎないことがほとんどです。

少々悲観的でしょうか。ではこの問いをさらに深掘りしてみましょう。本当に「代わりがない」といえるがあります。一つは家族です。この学校でも様々な家庭環境を持つ人がいますが、あなたになる精子を提供した父親と、生みの母親がそれぞれただ一人ずつ存在すること、そしてあなたが父親になったら子にとっては唯一の父親になります。この意味では、あなたに代わりはいません。この代わりのいなさ、というものは決してお金で代替できるものではありません。慰謝料、保険金などという言葉やシステムがあり、実際にそのようなお金が動くこともあります。そのお金の多寡とその人自身の価値は無関係です。

それでは家族以外はどうでしょうか。私は皆さんに「人を愛する」ということを伝えようと思います。人を愛することとは「自分を愛するように隣人を愛しなさい²」、つまり人を大切にする、ということです。カトリック学校に通う私たちにとつ

¹ 一コリント 13:1-13

² マルコ 12:31, ルカ 10:27-28, ヨハネ 15:17

ては耳にタコができるほど聞いてきた言葉だと思います。しかし一体どれだけの人が実践しているのでしょうか。

聖書、特に旧約聖書を引き継いで、イエスを描いた新約聖書は完全な愛がこの世に与えられると、この世はどうなってしまうのかということが書かれているように思います。イエスは律法の前で罪とされた人々のもとにやってきて、食事を共にしました。また大勢の群衆の前で話をするとそれは楽しく、正鵠を射て、エスプリの効いた話をし、大勢の人を惹きつけてきたことが聖書という形で残っています。多くの奇跡も起こしました。そのような魅力あり、カリスマのある方だったのですが、もちろんそれを快く思わない人も出てきます。それが主に律法学者、ファリサイ派と呼ばれる人々で、律法によって人々を縛り付け、人々の罪、悪いところを指摘することで人民の優位に立っていた人々です。彼らは結局、民衆を悪魔に引き渡し、自分たちでなく、民衆にイエスを殺せと言わせ、彼らの正当性の根拠であったモーセの律法に背いて³まで、イエスを殺してしまいました。私には、聖書は、特に新約聖書は神からの完全な愛が人間の世に現れると人間はどうなってしまうのかということが書かれていると感じ、同時に改めてイエスの愛の深さに感動します。

翻って私たち人間同士の愛はどうでしょうか。ここでの愛とは大切にするという意味です。恋人や夫婦、親子、兄弟に限らず、クラスメイトを大切にすること、知り合い、同僚を大切にすることです。私たちの代替可能性という恐怖を超えるには、この愛を実践するしかないと思うのです。

しかし私たちは愛の受け手としても、受け手としても不完全です。大切にしようとか何かしようとしても、「迷惑かもしれない」とやめてしまったり、あるいはまったく見当違いのことを行ってしまったり、有難迷惑になるのではと思ったりします。もちろんこれらのことは起こりえます。しかし、それでもなお、愛することです。私たちに「愛するか、愛さないか」の選択肢はなく、選択があるとすれば「どう愛するか」しかないのです。どうすればもっと愛することになるか内省する。これを Magis(よりよく)といえます。

一方で、私たちは愛の受け手としても不完全であることに自覚をしなければなりません。腹の立つ行動をしてきたあの人は、あるいは何もしないあの人は彼ら・彼女らなりに私を気遣ってくれていたのかもしれない。本当は愛してくれていたのに、言葉選びを間違えたのかもしれない。たとえて言えば、お茶だと思って飲んだものがコーラだったときのように、人はその愛に面食らってしまうのです。

そんな私たちも愛において完全に近かった時があります。いつだと思えますか。それは赤ちゃんだったときです。すべて与えられるものは愛として受け取り、逆に赤ちゃんであったあなたは周りを幸せにしていたはずで、「心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない⁴」というのはイエスの言葉です。言葉を習得し、大人になりつつ今、私たちは子供のようにいることはできなくなりました。他人には他人の愛し方があります。私たちがさまざまな形の不完全な愛を受け止められるよう、心を広く持ち続けること、愛することを願うのと同時に、良き受け手であることもまた大切なことで、願い求めるに値するものだと思います。私たちが唯一の父である神、そして私たちはその子である⁵と信じることは、人を大切にすることができ、人の愛を受け止められること、そしてその 8:15 意味で自分もそしてどの他人も掛け替えがないと信じることです。

ヨハネの福音書の中に、目立たないニコデモという人がいます。この人はファリサイ派でありながら、人目を避けてイエスに会いに来ていた⁶人です。本当はイエスのことが正しいとわかっているのに、他のファリサイ派の同僚の手前、はっきりと言い表さなかった人です。あなたたちにもそういうときがありませんか。彼はイエスと議論をして目が開ける体験をしています。イエスの死の前にファリサイ派が集まった場があり、本当はイエスが言っていることが正しいとわかりながらはっきりそうだと言いませんでした⁷。結局彼がイエスに再会するのはイエスが十字架につけられて降ろされた後、100 リトラ、すなわち王の埋葬の量の没薬を持ってきたとき⁸です。行動が遅すぎたのです。私たちもこのニコデモのような愛の傍観者になっているのではないのでしょうか。

皆さんに与えられた才能や能力、肩書などというものは、どれもそれに腰掛けるためにあるのではないのです。それを使って、よい社会、よい共同体とするために、用いるものです。2000 年前のイエスという完全な愛は人々の心に残り、現実に君たちはカトリック学校に通い、こうしてイエスの話を聞いています。カトリック学校に勤める私たちには、イエスの教えによって学校が作られ、現にそこから生活の糧をいただいていること、これに反論することはできないでしょう。

³ ヨハネ 19:15, 出エジプト 20:3

⁴ マタイ 18:3

⁵ ガラテヤ 3:26

⁶ ヨハネ 3:1-21

⁷ ヨハネ 7:51, 12:42-43 も参考のこと。

⁸ ヨハネ 19:39

今日のふりかえりのポイントは2点です。いずれか一つを選んで、自分の体験を書いてください。反省口調になる必要はありません。ポイントは自分の体験を具体的に思い出し、ふりかえることです。

1. 自分の愛の不完全さについて。愛が伝わらなかった経験、そして愛を受け取れなかった経験。
2. 自分の「ニコデモ」性について。良いことが何であるのか分かっていて/分かっているのに行動ができなかった/できないでいる経験

(生徒の振り返りノートから)

私は愛を与える存在として完全ではありません。全ての人に愛を与えるということが出来ていないからです。苦手な人は苦手で、そのような人々に愛を与えることは出来ていません。愛とは好き嫌い関係なしに与えることであると教わりました。しかし、私は判断基準に好き嫌いを含めてしまいます。私はこれが欠点であるとは思っていません。誰にでも愛を与えて生きている人はすごいと思いますし、とても良い生き方だと思います。しかし、私のように愛の与え方がよく分かっていない人が無理に全ての人に愛を与えると、いつか自滅します。一つの人生において全てを実行することは不可能であり、優先順位をつけるのが人生です。私は全ての人に愛を与えられるようになる前に、愛の与え方について考えようと思います。

Magis の日のお話

2024年6月24日 月曜日

担当教員: 佐藤雅孝

みなさん、おはようございます。

カト研担当の佐藤雅孝です。84期以降の授業を担当したことがないため、あまり私のことをよく知らない人もいるかもしれませんし、社会奉仕担当というイメージの人が多かもしれません。今年は高校2年生の授業を担当しています。先週はシンガポール・マレーシアへ研修旅行に行ってきました。

六甲学院は男子修道会であるイエズス会によって創立されたカトリック学校です。学校生活の中でこのことをあまり強く意識せず過ごしている人が多いかもしれません。しかしこのことは、卒業後の皆さんの中にずっと残り続けるものなのです。私は中高時代を鎌倉の栄光学園で過ごしました。名前は違いましたが、六甲学院と同じように週1回倫理の授業があり、愛の運動というボランティア活動がありました。同級生の中にはイエズス会教育を正面から受け止め、さまざまな活動に積極的に参加する人がいました。私は中高時代はあまりピンと来ず趣味にのめり込んでいましたが、今となってはもう少し中高時代に積極的に手を挙げて活動に参加すればよかったと思っています。ですので、今この仕事を任せてもらっていることに対し、何か導きのようなものを感じずにはられません。

イエズス会の創立者であるイグナチオ・デ・ロヨラの「霊操」のなかにある原理と基礎の一文を読みたいと思います。今日はこの言葉を受け止め、思いを巡らしてもらいたいと思います。

人間が造られたのは、主なる神を賛美し、敬い、仕えるためであり、こうする事によって、自分の靈魂を救うためである。

この言葉から六甲の建学の精神とは何であるのか、考えたいと思います。「神を賛美し」という箇所ですが、どういふことでしょうか。私の体験から話したいと思います。

私は教会で日曜日のミサのオルガン伴奏を担当しています。カトリック教会の典礼で使われる聖歌の歌詞は聖書の言葉からできています。伴奏者は聖歌の前奏を弾くことで、歌い方を会衆に伝えるのです。歌い方と言いましたが、聖歌の歌詞は聖書の言葉ですから、歌い方とは祈り方なのです。同じゆっくり歌うのでも、ただ歌うのと味わいながら丁寧に歌うのは全く異なるのです。最近は日頃の練習の中で神の美しさをどう表現するかといったことを考えることが多いです。

ルカによる福音書12章13節～ 愚かな金持ちのたとえを読みますので、味わいながら聞いて下さい。群衆の一人が

言った。「先生、わたしにも遺産を分けてくれるように兄弟に言ってください。」イエスはその人に言われた。「だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか。」そして、一同に言われた。「どんな貪欲にも注意を払い、用心しなさい。有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである。」それから、イエスはたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作だった。金持ちは、『どうしよう。作物をしまっておく場所がない』と思い巡らしたが、やがて言った、『こうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまい、こう自分に言ってやるのだ。』「さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ」と。』しかし神は、『愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか』と言われた。自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」

すべての人が自分らしく幸せに生きられるように力を尽くすことは、神を賛美することに他ならない、と私は考えています。すべての人が戦争に巻き込まれることなく平和に暮らせるように、病気の苦しみが少しでも和らぐように、貧しい人が少しでも豊かになるように、生きづらさを感じている人が社会から受け入れられるように、力を尽くすことです。皆さんは六甲を卒業した後、それぞれの得意分野を生かし、さまざまな場面で活躍することになりますが、このことを自分の進路を選ぶときの基準として欲しいと思います。

去年の9月の全校朝礼で、骨髄移植のドナーに選ばれたという話をしました。その後、10月に入院し、全身麻酔下で無事に提供を終えました。「血液の病気にかかりたくてかかる人はいないのに、ドナーが見つかるかどうかで、病気が根治できるかどうかが決まるなんて」と思い、もし自分がドナーに選ばれた場合は提供するつもりでドナー登録していましたから、迷いは全くありませんでした。相手の方が今どうされているのかを知るすべはありません。でも、もし仮に相手の方に万が一のことがあったとしても、移植が受けられることが決まったときは「これで生きられる」と希望をもって毎日過ごしていたに違いありません。風邪を引くことや怪我をすることすらダメでしたので、精神的なプレッシャーがありました。病院の医師・看護師がなるべく苦痛を感じないように手を尽くして下さいましたが、術後何日間か痛みがあったのも事実です。でも、もうどれくらい痛かったか忘れてしまいましたし、生涯で2回まで提供できるため次の機会があればもう1回提供しようと考えています。骨髄提供を通して私の中に残ったものがあります。自分自身を肯定する前向きな気持ちです。普段生活していると欠点や失敗だらけの自分が嫌になることもありますし、自分の責任ではなかったとしても他者から嫌な思いをさせられることもあります。その嫌な気持ちがどうでもよくなり吹き飛ばしてしまうくらいのもので、骨髄提供した相手の方の顔も名前も知りませんから、「ありがとう」と言われたわけでもありません。一人の命を助けたことで私自身も生かされている確信を持つことが出来ました。

イグナチオの「人間が造られたのは、主なる神を賛美し、敬い、仕えるためであり、こうする事によって、自分の靈魂を救うためである。」という言葉が、私の中にストンと落ちたときでした。

神を賛美、すなわち神の国の実現のために出来ることを積み重ねていくことで自分自身が肯定されてゆく、これは神からいただくことのできる最も大切な救いだと思います。

「最近どうもうまいかない」と感じている人はいませんか。うまいかないと思うと焦ってしまい、少しでも好転させようとして、さらに自分のことだけを考えてしまいがちです。するとさらにうまいかなくなるという悪循環に陥ることがあります。そのような場合は、自分の視点を変えてみると悪循環から脱出できるかもしれません。

六甲生のプロフィールを読みます。味わうつもりで受け止めて下さい。

- ・ありのままの自己を受け入れ、その自己を向上させることができる
- ・他者に開かれた心を持ち、生命(いのち)を豊かにする
- ・永遠なるものにあこがれ、真理を探し求める
- ・多様な文化を理解し、その中で共に生きることができる
- ・決断する意志力を持ち、よりよい世界の創造のために働くことができる

シンガポール滞在中に六甲の53期～58期の卒業生で、商社、物流、生命保険に携わる方が、83期生のために宿泊先のホテルまで来て下さり、話をして下さいました。いずれも海外で長い期間働いておられる方々で、今の仕事を選ぶに至った経緯や仕事をする上で大切にしていることなどのお話を聞くことができました。生命保険会社で働いている方は、顧客から預かった保険料を数千億円単位で預かり運用して増やす仕事をされておりました。「保険とは多くの人から公平にお金を預かり、病気などで多くのお金が必要で困っている人に分配すること。これこそが六甲学院で学んだ”Man

for Others, with Others”だと思った」ことが仕事を選んだきっかけだった語っていました。六甲で学んだこととして特に大切だと思っていることとして、2 人の方がインド募金を挙げ、インド募金に毎月協力することで豊かな心を持つ人間へと成長していくことを改めて実感しました。卒業生の一人は、仕事をする上で大切なこととして「引き受ける人のいない、つらい仕事を進んで引き受けること。そうすることで周囲の人から信頼され、尊敬されるようになる」と語りました。険しき道をあえてゆくことを実践されている卒業生の言葉には迫力があり、重みを感じました。「『コップに水があと半分しか残っていないと思うか、まだ半分も残っていると思うか』両方の価値観があることを知っておくことで『こうあるべきだ』という考え方から解放され、頑張るべき時に頑張ることができ、つらいときに気持ちが楽になる」と話していました。卒業生の皆さんの話を伺うと、どなたも現在大変素晴らしいお仕事をされていますが、どこかで大きな失敗も経験されていました。また、六甲在学時代から勉強が得意だった人もいましたし、勉強が苦手だった人もいました。今日に至るまでどこかで勉強とはしっかりと向き合っていましたし、つらい中で歯を食いしばって頑張らなければならない時がありました。「他者のために行動するためには、まず勉強ができるようになってから」といってガリ勉するのもよくありませんし、自分のことを全く顧みず勉強をおろそかにして他者のためだけに明け暮れるのもよくありません。自己の向上も、他者への貢献も、すべてをバランスよくやっていくことが求められます。

ほかに、私が尊敬している人の中から二人を紹介します。

片岡功一さん

六甲を卒業し、広島市民病院で循環器小児科の医師として活躍されています。片岡さんは毎年モンゴルに渡航され、モンゴルで心臓の病気で苦しむ子どもたちのために治療を行い、またモンゴルの心臓の治療の水準を高めるべく現地の医師の研修にも尽力されています。

浦義孝神父

東ティモールの聖イグナチオ学院の創立段階から関わり、現地の中高生の教育、そして教育大学を設立して教員の養成をできるようにすることに尽力されています。聖イグナチオ学院は東ティモールの首都のディリから離れたウルメラ村にあります。その理由は、首都のディリに学校を作ったら裕福な生徒しか集まらなくなるからだそうです。裕福な人にも貧しい人にも高い水準の教育を行うことを目指しています。

今日一日思いを巡らして欲しいことを伝えます。

イグナチオ・ロヨラの霊操の「原理と基礎」の中にある言葉、ルカによる福音書 12 章の愚かな金持ちのたとえを繰り返し読み、自分自身のこれまでの歩みについて振り返って下さい。

今日の振り返りの時間で考えて欲しいことを伝えます。一日思いを巡らしたことと六甲生のプロフィールをもとに、自分の将来の生き方について、とくに何に貢献したいと思っているかについて書いて下さい。

(生徒の振り返りノートから)

今日のお話から、将来の生き方を決める必要があることが分かった。佐藤(雅)先生は、他人のために骨髄バンクにドナー登録をし、しかるべき日が来たとき、ドナーとなるという将来を見据えておられた。自分は他者のためにどのような未来へ向かっていくかという考えがなく、ただ、数か月先の大学入試ということだけで頭がいっぱいいっぱいである。しかし今はこれで良いと思っている。将来、社会や多くの人のための人になるために、今できることをやりたいと思う。最近、水質問題や外来生物による在来種の生息地域の減少という問題について興味を持っているが、この問題は他者のためという観点から対処することになるし、再発防止策を考えることは何かの役に立つと思うので、今、この将来のために真剣にやっていきたいと思っている。

81 期 巡礼・黙想

時を超えて

81 期 高榮欣二

最後のカト研としての活動として、何を学び、何を未来の自分に繋げるか、そればかりをずっと考えていました。「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」。司祭はいない、別の宗教を形式上信じなければならない中で遥か 7 代、200 年に亘って独自の信仰を守り続けた人々の苦しみを、信仰が許された後の喜びを、感じ取ろうと必死になっていました。友人達は楽しんでいました。五島という遠くの地に行く事、普段見る事のない様式の建物、苦しみの歴史を学ぶ事さえも、ある意味で楽しんでるように見えました。それは不謹慎な事かもしれません。場違いな雰囲気を感じ出していかかもしれません。しかし、それでよかった、いや、そうあるべきだったのだろう、と考えています。

ガイドの方は、五島列島を「信仰の島」と仰りました。キリスト教の伝来以前から、土着の信仰に加え、遣唐使船の寄港地として中国や日本各地の思想に触れ、最澄と空海の伝説も残るなど、何か「ある」物を信仰する土壌が出来上がった土地である、と。そうした信仰が、いつしかその出自も分からなくなるほどの果てしない時を超えて、ある物は消え、また混ざり合って今の五島の「心」を作っているのだと思いました。そして次第に、そこにいる自分たちに出来る事は、永い時の中で作られたこの雰囲気を感じ取りその中に溶ける事、そしてこの雰囲気の中に遥か遠く離れた西洋の宗教が混ざっていて、それを欠けさせられた時代があった事を想起し、信者達の「辿った」道を見直す事だと考えるようになりました。

史跡を見、知識をつけるだけならば、僕達がわざわざ五島に行く必要などありません。そこで写真には映らない、文字には現せない物を感じ、記憶する事で初めて、行く事に意味があるのではないかと思います。楽しむことで流れていた空気を記憶し、その記憶をいつか「懐かしいな」と思い出すことが何より将来につながりそうに思われます。僕達の人生は有限です。出来ることだて限られています。それでも、その場に何かを見出すこと、それを記憶すること、何かを信じることは一人ひとりにしかできない、人間の特権でしょう。そしてそこで感じた物、積もった様々な感情を、幾許かの時を経て誰かに伝え、繋いでゆくことが、有限を生きる僕達に出来る精一杯のことだと思いました。

そして、それが有限であった潜伏キリシタンの方々が無限とも思える長い長い苦難を耐え、絶対ともいえる法さえ乗り越えるために出来た精一杯である、とも。

最後に、この旅行を企画していただいた先生方、旅行会社の方々、巡礼中に出会った全ての方に、そしてともに参加し、全力で楽しませてくれた 9 人の同級生に感謝を申し上げます。

～海と空の青、山の緑、椿の赤～

引率教員：岩井あづさ

私の長崎の教会の旅は、2004 年に、長崎黙想の家(2020 年に閉館)でシスターや信者の方の黙想指導をされていたスペイン人のマヌエル・ディアス神父様(1992 年度まで六甲で勤務。2004～2014 年長崎黙想の家の責任者)を訪ねることから始まりました。長崎市はすり鉢状に形成された坂道の町。すり鉢の底にある JR 長崎駅から、登りはタクシー、下りは長い階段を使って上り下りしながら、「来なさい」と仰って下さっていたディアス神父様を約 10 年間、2 年に 1 回程度訪ねました。ディアス神父様は、私の夫の恩師で、私たち夫婦の結婚式の司祭をして下さった神父様でした。

長崎黙想の家では、シスターが食の準備、神父様の仕事のサポート、建物の管理などをされていました。古い建物でしたが、きれいに整えられたお部屋、長崎で捕れた魚や野菜、特産の蒲鉾や五島うどんなどが並ぶ家庭料理、きれいに花瓶に生けられ祭壇の前に置かれたお花など、温かく家庭的な長崎黙想の家の佇まい、親切で優しく慈悲深いシスターの働き方やお心は、私の生活の仕方、人としての生き方の見本となりました。中でもシスター中島は、いつも優しい笑顔と言葉かけを絶やさず、てきぱきと仕事をこなされていました。恐らくディアス神父様が「行ってお世話をお願いします」と仰って下さったのでしょう、初めて長崎黙想の家を訪ねた時、市内を車で案内下さいました。「生徒に親切にしてあげなさい」と常々仰っていたディアス神父様と親切なシスターと過ごす長崎黙想の家は、第二の故郷のように思うようになりました。シスター中島は五島出身で、ある時、ディアス神父様と五島へ行こうというプランが出て、シスターが船の時間や宿を調べて下さったのですが、あいにく台風が近づき、船が出ないとなりました。シスターご出身の五島をディアス神父様と訪れるということで大変楽しみにしていたのですが、その後、チャンスは巡ってきませんで

した。今回、ひよんなことから81期高3の五島列島巡礼旅行の引率を賜ることとなりました。シスター中島とも久しぶりに連絡を取らせて頂きました。

五島列島は、大きくは南から、福江島、久賀島、奈留島(と周辺の島々の五島市。下五島と呼ばれる)/若松島、中通島(と周辺の島々の新上五島町。上五島と呼ばれる)から成っています。今回は下五島から上五島に向かって訪れました。五島での基督教の歴史は、基督教迫害と大村藩からの移住の貧しい暮らしなどの厳しく辛い歴史とともにありました。木造→レンガ→鉄筋コンクリートと時代を経てより丈夫な材質に変えながら、こうもり天井(丸く湾曲した天井をリブで支えた建築様式)、古い時代の祭壇や脇祭壇、聖体拝領台など、美しいたたずまいを見せる西洋建築の海辺の教会群。赤い樫のモチーフがちりばめられたステンドグラスや教会内の装飾。教会群がなぜ海辺に多いのかは、基督教迫害が強まってきた江戸時代に、五島の開墾のために大村藩から移り住んだ基督教信者が、すでに平野部や暮らしやすいところは先住の人がいたために、山が切り立った開墾の難しい海辺の地域を開墾して貧しい暮らしをしていたことを表しています。赤い樫は、潜伏し見つかると厳しい拷問を受けても基督教を棄てなかった強い信仰心や殉教の血を表しているということです。

また、潜伏キリシタンと隠れキリシタンという言葉の違いについても今回知りました。迫害を受けて潜伏して信仰を持ち続けた潜伏キリシタンが、明治6年に信教の自由が掲げられると、1 改めて基督教の洗礼を受けた人、2 仏教に改宗した人、3 潜伏中の信仰を守り続けた人、の大きく三つに分かれたそうです。3を隠れキリシタンと呼び、祈りの言葉を語り継ぎながら細々と信仰を守ってきましたが、現在は自然消滅しつつあるそうです。表舞台に出ることなく、静かに信仰を守る人々の気持ちと時代の流れに思いを馳せておりました。

「おかえりなさい。寒かったね。殉教者とともに。ディアス神父様からのご伝言、明朝6:30ミサです。あとはごゆっくり。また明日」。長崎の町を歩いて疲れた私たち夫婦をこのようなメモとともにいつも温かく迎えて下さったシスター中島や五島出身の長崎のシスターの慈悲深さは、五島での辛く悲しい歴史と強い信仰心を土台に生まれたものだと思います。81期高3生は、進路も様々で後期の発表も待ちながらの通常であれば落ち着かない時期だったことと思いますが、思い切って遠くまで来たことで旅に没頭できたのは良かったと思います。大変落ち着いた過ごし方ができておりました。神様のお恵みをいっぱい受け、4月から元気な一歩を踏み出して行く事ができることでしょう。